チンパンジーと酷似する「出あるき族」ほか ケータイによる「日本人のサル化」はさらに進んだ

社会性や思考能力がどんどん退化していく

深夜を過ぎても群れ集う若者たちの姿は、かつてとは異質な形で増殖している。ベストセラー『ケータイを持ったサル』でサル学者としての視点から最近の若者を分析した京都大学・正高信男教授は、最新刊『考えないヒト』で、若者のさらなる「サル化」を警告する。

京都大学霊長類研究所教授
正高信男
MASATAKA Nobuo

「どこでも家の中」になった若者たち

道端に座り込む。電車の中で化粧をする。路上で食事をする。公と私の区別を失った若者たちが出現した背景には「ケータイ（携帯電話）」の存在がある。サル学者として、この現象を分析した前著『ケータイを持ったサル』は大きな反響を呼んだが、それから2年、「ケータイによる日本人のサル化」はさらに進行している。

最大の変化は「出あるき族」の激増であろう。自宅で家人と寝食をともにせず、特定の友人と街を徘徊する若年層が目に見えて増加しているのである。

自室から出ない「ひきこもり」が社会問題となって久しいが、じつは「出あるき」と「ひきこもり」は、行動こそ正反対のようだが、多くの共通点がある。それは、縄張りを設定し、そこから外へ出るのを拒み、未知の世界を恐れるという価値観だ。

少し前まで、自宅に帰らない行動は「プチ家出」などと呼ばれていたが、「出あるき」と家出は本質的にまったく異なる。

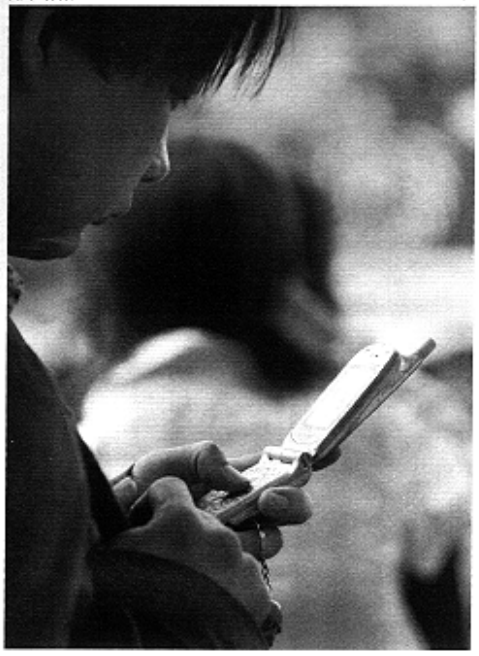
寺山修司の『家出のすすめ』がベストセラーになった70年代の家出は、未知の世界に足を踏み出す行為であり、親の庇護と決別して社会的に独り立ちしたいという願望が形を成したものだった。しかし「出あるき」の場合は、クラブや友人の家、24時間営業の漫画喫茶など、いつでも家に戻れる馴染みの場所を泊まり歩くだけで、自立を目指したものではない。

渋谷センター街に行けば、平日の昼下がりであっても、出あるき人間の生態を観察できる。特徴は、仲間が昔からつきあいのある同性・同世代の友人ばかりであることだ。彼らは数人のパーティ（集団）をつくり、行き慣れた店などをただ徘徊し続ける。また、その行動範囲は非常に限定されている。渋谷をテリトリーとするパーティが、新宿や原宿などへ遠征することは稀だ。慣れない場所に出たり、新しい友人と話すことは、「疲れる」ことなのだ。徘徊しながら空腹になれば、コンビニで食料を調達して道端で食べ、ファーストフード店でだらだらと時間を過ごす。

こういった「出あるき人間」たちの生態と、驚くほど似ているのが、霊長類の中でもっとも人間に近いチンパンジーである。チンパンジーの群れは、通常、数十頭のメンバーで構成されるが、みんなで一斉に行動することはなく、多くて5頭ぐらい、そして同性・同世代の少数のパーティに分かれて行動する。我々研究者は「遊動」と呼んでいるが、彼らは一か所に落ち着くことがなく、食料を採りながら徘徊し、夜になると樹上に草などでベッドを作って眠る。チンパンジーの遊動の軌跡を追うと、実はやみくもに動き回っているわけではなく、絶対に一定の地域から外に出ないことがわかる。

遊動中に別のパーティと出会うと、お互いに「ホッホッ

AP／WWP

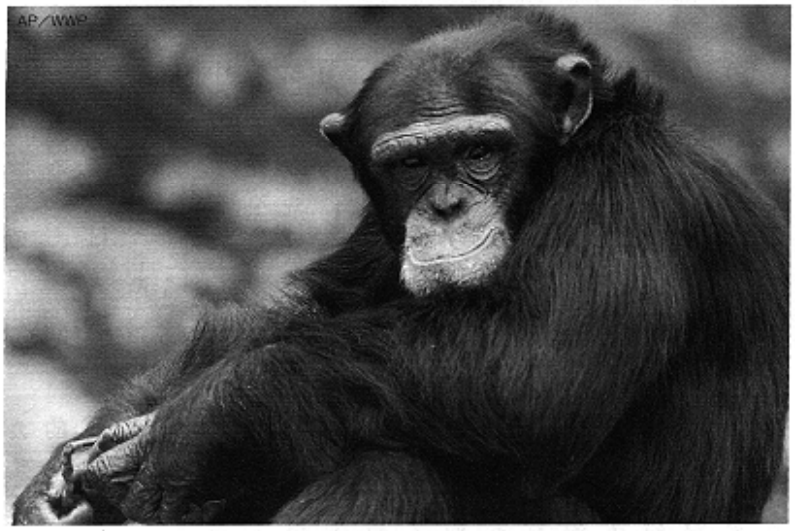


ケータイの登場は社会・家族を変容させた。

【PROFILE】1954年生まれ。大阪大学人間科学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。アメリカ国立衛生研究所客員研究員などを経て、現在、京都大学霊長類研究所教授。専攻は比較行動学。著書に『ケータイを持ったサル』『考えないヒト』（中公新書）、『天才はなぜ生まれるか』（ちくま新書）ほか。

時事通信社

群れて路上で休む若者たち（写真上）。人間に一番近い霊長類のチンパンジーは数頭で馴れた地域を避動する（写真下）。



AP/WWP

ホッ」と音声を交わして別れる。ときにメンバーが交換され、離合集散する。これは渋谷の若者たちが、知り合いのいるパーティと出会うと「おう！」などと軽く立ち話を交わし、ときにメンバーが入れ替わって、それぞれ遊動を続けるのと、ほとんど同じである。

こうした「出あるき」を可能にしたのがケータイの普及だ。親は「ケータイを持たせてあるから」と、家に帰らないことを容認する。しかし、家に帰らない子どもに、親が実際に電話をかけることはほとんどない。「いつもつながっている」安心感に頼っているだけで、本心ではかけることを恐れているようにさえ見える。子どもは子どもで、そうした親の気持ちを見抜いて、「何かあったら連絡するから」と安心させることを忘れない。しかし、幻想の安心感の裏で、家族のコミュニケーションは確実に崩壊している。24時間、どこでも誰とでもつながるケータイは、実際には、家族や社会など、人間が進化の過程で作り上げてきた関係性を、一挙に変容させたのである。

しゃべりながらメールを打ち続ける

ケータイによる若者の「サル化」で、もう1つの大きな特徴がコミュニケーション能力の低下である。

サルの集団というと、ボス猿がいて何でも独占するニホンザルをイメージする人が多いだろうが、人間にもっとも近い霊長類であるチンパンジーは、じつは群れの中で平等主義と気配りを重視する生活をしている。メンバー間に優劣はあるのだが、食物が入ったら分配しなければならず、その平等主義をモニターするのが優位の個体となる。だから、チンパンジーの群れの中で優位にいる個体は気配りに長け、劣位の個体も好んで群れに参加している。

では、渋谷の若者はどうだろうか。たとえば5人からなるパーティが、おしゃべりを始め、1人が無口になったとしよう。これは彼らにとって、非常に気まずい事態として認識される。黙った1人でなく、全員が「マズい」と感じ、皆が等しく参加できる話題を必死で探そうとする。このような気配りに最近の若者は長けているが、それをもってコミュニケーション能力があると判断してはならない。本来の対話は異論を加えながら発展していくものだが、彼らが求めているのは、仲間全員が参加できるように場をもたせることであり、結果、会話の内容は意味のない希薄なものばかりとなる。

また、彼らを見ると、おしゃべりしながらも、ひっきりなしにメールを打ち続けていることに気づくだろう。誰に打っているかといえば、相手はその場にいないメンバーだ。そしてメールの返信は通常、瞬時に起こり、それを仲間同士で見せ合うのである。相手側でも同じことがおきている。こうして、みなが「平等」に「つながっている」ことを確認し合うのである。こうした

新装刊 小林よしのり責任編集長『わしズム』大反響発売中！

バーティから特定の相手との深いつき合いが生まれることはない。メーリングリストから外されれば、それで関係は終わりなのである。サルは、自分が群れの中にいるのを示すために、継続的に「クークー」と鳴くが、仲間でいることを確認するためだけにメールを打ち続ける行為も、それと同じなのではないか。

「キレる」子供とケータイとの関係

いまやケータイの使用法は通話でなくメールが主体になっているが、肉声で言葉を交わすことさえ億劫な彼らのコミュニケーション能力は、やはりメールの中でも退化している。その極端な例が、女子中高生たちが使う「ギャル文字」だ。

ギャル文字というのは、たとえば、「ナ」と「こ」を並べて「だ」を表現するような表記法で、今やマニュアル本まで売られている。たとえば「だーいすき」なら、「ナ(~ゞ~ゞ(ナとこ)で「だ」、§が「す」になる)」と打つ。また「~」が「↓」や「⇓」へと変形の度合いを増すにつれ強い意味になる。メッセージそれ自体は、好き・楽しい・へこんだ、などの感情表現だけで、内容に意味はない。入力にかけた労力の大きさで、相手に気持ちの強さを伝えるのだという。

伝えるものが感情表現だけというなら、サルが恐怖で「キーキー」といったり、怒りで「ガッガッ」と吼えているのとほとんど変わらない。霊長類の中でも、もっとも下位にいるキツネザルは、天敵の種類で警戒音の種類を変えるが、それと同レベルであるといっても過言ではない。しかもその言葉は仲間内でしか解読できず、第三者に情報を伝えるという言語の機能からも逸脱している。すでに言語の範疇を超えて、単なる視覚的な記号だ。子供たちは言語ではなく、ビジュアルで会話しているのである。

最近の研究では、人間の脳のメカニズムは、判断を下す中央実行システムに、「音韻ループ」と「メモ」という2つの記憶装置がぶら下がっているということがわかってきている。音韻ループというのは音の情報、すなわち言語を繰り返すことで記憶するところで、メモは視覚的な情報を記憶する。音韻ループからの情報による判断は逡巡的であるのに対して、メモからの情報による判断は衝動的であるという特徴がある。

言葉を使って思考判断している限りは、感情的に爆発しそうになっても、「自分は何に怒っているのか」という思考がループを逡巡するので一時的に抑えられるが、この回路が機能しない人間はその抑えがきかなくなる。それが「キレる」という現象である。キレて過剰な暴力を発露した人間に、キレた理由を問うても、たいていは答えられなかったり、意味不明だったりする。そもそも言語化を行なっていないから、言葉で説明できないのは当然である。

サルも、端で見ている人間にはささいなことに見える理由で、突然怒り出して鋭い攻撃性を示すことがよくある。サルは当然、言語による思考はしないので、感情の起伏がダイレクトに反映される。キレる人間もそれと同じである。

昔は頻繁に電話をかける相手の電話番号はそらで覚えたものだが、今はケータイのメモリーに保存してある番号を呼び出すだけでいい。未来のユビキタス社会では、タクシーを呼ぶときにGPSケータイを使うだけで、場所や道順を説明しなくても、目の前にタクシーが迎えに来てくれるという。

普通なら頭を使って考えたり、言葉を駆使して伝えたりするところをケータイが代行してしまうわけで、そうなるとますます人間の思考能力は衰えていく。IT化は日々の煩雑な作業から我々を解放したが、同時に人間がこれまでまとってきた文化的な「まとい」を剥ぎ取ってしまうのである。ちなみにケータイを通話のためではなく、メール端末としてここまで使うのは日本人だけだ。

人間の行動をサルになぞらえることに批判もあるだろうが、長年、霊長類を研究してきた立場から見て、これまでと明らかに異質な行動がIT化によって現われ、それがサルの行動に酷似しているのは、事実である。社会性を失い、言語能力を退化させ、ラクだけを求める若者たちがそのまま高齢化したら、サル社会ならともかく、人間社会では「新しい下層民」に陥る危険が大きい。あるいは、彼らをこそ「次世代人類」と呼ぶべきとの意見もあろう。

いずれにしろ、便利さを生み出す技術に疑いを持たない日本人が、10万年のときを経てサルに戻っていくという私の予想が、当たらないことを願うばかりだ。

（談）

AP/WWP

テリトリーからは決して出ないのが「出あるき族」の特徴だ。